
悪夢の時間-いじめ-

種原美穂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪夢の時間 - いじめ -

【コード】

N8384H

【作者名】

種原美穂

【あらすじ】

わたしが本当に体験した出来事をそのまま小説にしたものです。「いじめ」を描いています。見たくない人は、どうぞ見ないでください。

これは、わたしが実際に体験した出来事を、そのまま小説にしたものです。

しかし、人物の名前などは違います。小説に出てくる名前は全て存在しません。仮に存在しても、その人とは全く関係がありません。

春。中学を卒業し、受験を終えて、わたしは合格した。

中学時代の友達とは違う高校に合格したけど、その時のわたしは「高校に合格できた」という気持ちに浮かれていた。1ヶ月後にあんな事があるとは、当然想定できなかつた。

浮かれたまま、合格した高校に入学した。

そして、新しいクラスで友達ができた。

新しい友達は4人。

1人目は、立見真衣。スポーツが好きな女の子だった。高校に入学して初めてできた友達だった。

2人目は、西牧由香里。背が高く、おとなしい女の子だった。

3人目は、水橋さやか。面白いことをしてくれる、優しい女の子だった。

4人目は、天井優。わたしと同じ趣味を持つ、話しやすい女の子だった。

入学してすぐにできた、この4人の友達と、わたしは楽しく学校生活を送っていた。

しかし、ある日。わたしの学校生活は、少しずつ悪夢へと変貌した。

何が原因なのかは、わからない。

ある日。突然、友達はわたしの存在を「なし」とした。

次の授業は移動教室だから、移動しようかと思ったら、友達はわたしを置いて、勝手に移動した。

一緒に昼食を食べている時、立見真衣は友達にお菓子をあげるが、何故か、わたしはお菓子をもらえなかった。

わたしが声をかけても、「無視」をして。

気がつけば、グループから外されてしまった。

わたしは、孤独になってしまった。

クラスでは、もうグループができあがり、わたしは新しいグループに入れそうにもなかった。

当時のわたしは、これだけでショックを覚えた。

だけど、学校は行った。

孤独は寂しかった。だけど、我慢した。

親にも話し、学校の先生にも話した。ずっと、このままでもいいと思っていた。

昼時間。教室で寂しく昼食を食べるのは嫌だったので、学校にある「相談室」という教室で昼食を食べていた。先生は相談にもものつてくれたが、それは何の解決にもならなかった。

体育でペアを組む時、先生は「隣の人とペアを組んで」と言った。隣の人は、立見真衣だった。立見真衣は嫌そうな表情でわたしを見つめた。

近くにいた水橋さやかは、立見真衣に「近くで一緒にやろうよ」と囁いた。

「こいつらに嫌われた」と、わたしはすぐに察した。

そして、わたしは、奴らからいじめを受けた。

わたしに向かって「キモい」と悪口を言った。わたしを1人にした。孤独にした。

クラスの人たちも、それを知っていたはずなのに、見て見ぬふりをした。

親に話したが、親からは「強くならなきゃいけない」と言われた。そればかり言われた。

人間、そう簡単に変わるわけがない。強くなるとは、どういう意味なの？ とばかり思っていた。

学校に行ったが、どうしても嫌になったので、1限目終了後、保健室に行つて2限目を潰した。

保健の先生からは「3限目からは授業に出てね」と言われ、紙を

渡された。

わたしは保健室を出て、教室へ帰ろうとしたが、次の授業が移動教室だったのか、教室の扉は閉まっていた。色々考えている間に、授業に出るのも面倒になり、相談室に行こうか、と思った。

そして、相談室に向かう途中。渡り廊下を歩いていたらわたしは、次の授業が行われる教室の窓を見つめた。すると、立見真衣と水橋さやかがわたしを見下すように見つめ、指を差して笑っていた。弱いやつを見下すかのように。

そのことに、心は怒りに満ちた。涙が溢れそうになった。

走って相談室に行つて、泣いた。ずっと泣いていた。

すぐくム力ついた。アンタたちは何者なんだ！？ 何様のつもりなんだ！？ ……そう心で何度も思いながら。

結局、わたしはその日を最後に、教室に入ることはなかった。

先生の勧めで、時々カウンセラーの人と相談していた。けど、それは何の意味もなかった。

その日から、種原は学校に登校することなく、家で引きこもるようになった。

とはいえ、学校を退学したわけでもない。

親は「学校に行きなさい」と、何度もわたしを説得した。だけど、行けるわけがなかった。

今回体験した出来事のせいで、わたしは「対人恐怖症」になった。

人に話しかけるのが、すごく嫌になった。人と接するのに、恐怖を覚えた。

おかげで、わたしは初めてのバイトも、無断欠勤で辞めた。人が怖くなったから。

被害妄想の部分もあるのかもしれない。被害妄想なんかじゃない。全部、真実。

引きこもること、早2カ月。わたしは学校を退学した。

これでよかった。もう、奴らとの縁は切れた。……だけど、将来は乱れてしまった。

ただでさえ、人と接するのが嫌なのに、これからは「学生」じゃなくて「社会人」。仕事をしなければいけない。

ずっと家に引きこもっているが、いつも親に何か言われる。何か言われるたびに、腹がたつ。

わたしは何も悪くはない。悪いのは、他人。

わたし自身を正当化しているわけではない。わたしは本当に何も悪くはない。正しいのだ。悪い事を正そうとしているわけじゃない。

今、こうやって小説を執筆している時でも、わたしはニート。

いつか、家を出て仕事ができる日が来るのだろうか。……わたしに、輝かしい未来は来るのだろうか。

でも、そんな日が来たらいいな、と。
そんなことを思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8384h/>

悪夢の時間-いじめ-

2010年10月21日23時19分発行